

㊦ 「粘りが大事や」と思うねん

「先生、壁ぬれるようになったで」

中学校を卒業して半年ばかりたったある日、S君がやってきました。

S君は、国語や数学の勉強は苦手でした。明るく元気な子なのですが、本を読み漢字を覚える、式を書き計算するというのは苦手なのです。しかし、体格もよく、走・投・跳の力に恵まれた彼にとって、体育の時間はリーダーとして活躍できる時間でした。

そんなS君が、中学校を卒業して左官の仕事に就きました。まじめにコツコツと努力する彼にはうってつけの仕事であったようで、親方にも可愛がられ、めきめき上達していったと言います。

「先生、壁ぬれるようになったで」

という言葉の次は、

「せやけど、天井はまだできへんねん」

こっちを塗ったと思ったら、あっちのほうが落ちていたというのです。職員室で、彼を取り囲んでいた私たちは、そんな仕事の大変さを思い、そうしたことを着実に少しずつこなしていっていると話す彼に感動しました。

次に、S君に会ったのは数年後のことでした。彼は

「先生、もう天井も大丈夫やで」

と話してくれました。たいていのところはやれるようになったと言うのです。けれども、彼の今困っているということについては、どうにかならないのかなと思いました。彼は、

「先生、おれな、運転免許が取れへんねん」

「おれ、漢字があかんよってなあ。問題が難しいねん。絶対に違反みたいなんせえへんねんけどな」

と言うのです。

漢字の読み書きの力には個人差があります。彼が苦手なことは事実です。短い時間に多くの問題の答えを要求される交通法規の問題は、彼にとっての大きな関門です。しかし、日本語を話せない、読み書きができない、そんな外国人が母国で取得した国際免許証を持って走り回っているのですから、これはおかしいじゃないかと思いました。

彼の「せやけど、左官の仕事は下手でも運転できるやつを雇うたらええわて思うてんねん」という言葉に慰められ、ちょっと気にしながらも、忙しさに取りまぎれそのままに年月が過ぎてしまいました。数年後、そんな体験をあるところで話していたら、今はそんな心配はなく、口頭での質問に答えることで免許証が取得できると聞きました。そのとき、なんだかほっとした記憶があります。

次に会ったのは、彼が一人前の左官として、2階建ての家の壁を塗っている現場でした。彼は、奥さんといっしょに仕事をしていました。左官の仕事は彼が中心で、彼女はそれを手伝っていました。しかし、資材の運搬などは、運転免許を持っている彼女の仕事なんだということでした。2人は協力して仕事を進めていました。

「この家の外壁の塗り替えはどのくらいかかるの」

と尋ねると、おおよその値段を教えてくれた後、

「見積もりみたいなんすぐにできるねんけどなあ。紙に書くのがいやですわねん。まあ、こいつがやってくれるよって助かってます」

ということでした。そんな言葉を聞きながら、自分の得意の分野で活躍している彼の自信ありげな姿に感動しました。

「先生の理科は面白いねんけど、難しいねん」と言うTさんも数学や理科が苦手でした。しかし、彼女にはすごい特技がありました。人の顔をすぐに、そして、完璧に覚えるのです。それだけではありません。

その人についての情報がもの見事に頭に入るのです。

T先生が転勤して来られ、私の学年に所属することになったときもそうでした。彼女は、私のところにやって来て

「T先生、秋に結婚しはんねんで。知ってるか」

と言うのです。私が、

「知らない」

と答えると

「今住んでるのはN市やけど、秋からはS町に住まはんねんで」

と言うのです。

「私はなかなか顔を覚えられないんです」と白状すると、「それだけ人の顔は覚えられないとすれば、先生としては失格ですね」と言われ、

「あの人のお父さんが〇〇会社に勤めておられて、今住んでおられるのはAさんと同じ町ですよ」といった情報がなかなか頭に入らない私と対照的、それは、ちょっとやそっとの努力ではどうにもならない私の欠陥なのです。

教壇に立っているとき、相手にする児童や生徒の胸には名札がありました。しかし、校長室にお出でになるお客さんには名札がありません。つい最近、お会いしたらしい方に、お名前を尋ねるわけにはいきません。こんなとき、Tさんがそばに居てくれて、

「〇〇さんがお出でになりました。この間△△のことでお見えになった方です」

そんなふうに教えてもらえるなら、どんなにいいだろうと思ったものです。

K君は体が不自由でした。小学校には、お母さんに送ってきてもらい、学校では車いすで生活していました。この学校の廊下と教室の間には段差がありました。申し訳ないことだとは思いましたが、すべて

の部屋の段差を解消するには至らず、お母さんには「みんなで手助けする学校にしますから」と了解してもらっていました。運動会にはハンデをつけましたが、友達と車いすで同じコースを走りました。応援はいっぱいでした。なにしろ努力家なのです。

字を書くのにも努力が要りましたから、文章を書くのにはトーキングエイド（会話や筆談が困難な人のための携帯型コミュニケーション機器で、文字盤のキーを押すことによって、音声出力と液晶画面表示で相手に伝えることができる装置）を使い、会話にも

これを使っていました。あまりきれいな発音ではなく、もっと改良されたものできたらいいのにと思いながら、時折これで会話を楽し



みました。その後、彼は、書道に興味を持ち、先生について熱心に練習し始めました。そして、どんどん腕を上げ、展覧会を開くようになりました。毎年、彼から届く年賀状にはしだいに腕を上げていく彼の作品があります。それはなかなか味のある字でした。上の書は、私が還暦を迎えた平成8年・丙子の年にくれた年賀状に書かれていたものです。

人はみんなすばらしいものを持っています。しかし、力足らずのところもいっぱいです。良いところを伸ばすのも、まずいとところをなんとかとがんばるのにも、大切なのは粘り強さなのでしょう。

「いろんなことがあるけど、先生、大事なのは粘り強さやで」
長い教員生活の中で出会った子どもたちから学んだことはいっぱい
です。「人みな我が師」なのです。